

はんぶんさんま

高知 四年 さおり

「あっ。」

ばんごはんのさんまを三びきやいて、おさらに入れようとしたら、ニひきめを、お母さんがゆかにおとした。さんまは、ピシヤツとなつてくしゃくしゃになった。

わたしは、

「げっ。」

と思った。お母さんは、目が大きくなって、口があいて、さんまを見ていた。わたしはおちたさんまがおかしくなつて、

「ワハハハ。」

ともものすぐくわらつた。

お母さんは、まゆげがハの字になって、

「お母さんが食べちやるけん。」

と言って、おちたさんまを手でひろいはじめた。わたしは、急にお母さんがかわいそうになった。

お母さんに、

「わけちやおか。」

と言つた。けど、お母さんはさんまをひろいながら、

「もつたいないから食べる。」

と言つた。そして、おちたさんまをおさらに入れて、テーブルの上においた。さんまはくしゃくしゃになってあまり形がなかった。

お母さんとお兄ちゃんとわたしと三人で、ごはんを食べはじめた。

お母さんはひろったさんまを食べはじめた。よごれてないところを食べるから、あまり食べるところはない。わたしは、さんまを食べながら、お母さんがとてもかわいそうになった。

「もういらん。」

わたしは、自分のさんまをはんぶんのこした。お母さんは、

「もういらんが。」

と、しんぱいそうにわたしに聞いた。わたしは、ほしかったけど、お母さんがかわいそうだから、

「いらん。」

と言った。

お母さんは、わたしがのこしたのを食べていた。おいしそうだった。

わたしは、

「よかった。」

と思った。



(指導 坂田次男)